

トルクメニスタンにおける 中等教育向け日本語教科書制作

上原 龍彦

要 旨

本稿では、トルクメニスタンの中等教育機関で使用する日本語教科書制作について紹介する。まず、トルクメニスタンにおける中等教育段階の日本語教育の状況を概観する。次に、5 学年から 7 学年の教科書制作の経過を、各教科書の概要と共に説明する。最後に、これらの教科書制作から筆者が得た学びと今後の展望を述べる。

キーワード

教科書制作 中等教育 指導要領 言語教育の考え方 学びやすさと教えやすさ

1. トルクメニスタンにおける中等教育段階の日本語教育

トルクメニスタンでは、2016 年 9 月から中等教育段階¹の日本語教育が開始された。2015 年 10 月に日本の首相が初めてトルクメニスタンを訪問したことを契機に、トルクメニスタン国内の日本語教育拡大が決定したためである。初年度は、首都アシガバット市内の中等教育機関（以下、「学校」）4 校、地方 5 州（アハル州・バルカン州・ダショグズ州・レバプ州・マリ州）の 8 校、合計 12 校で日本語教育が実施された。対象は 5 学年の生徒で、学習者数は 834 名であった（国際交流基金 2016）。尚、学校は 4 学期制で、各学期の期間は 2 か月程度である。日本語の授業は 45 分授業が週に 2 コマ設置されている。年間で 34 週の授業があり、1 学年当たりの日本語の授業は 68 コマとなる。次年度は、途中、教員の異動や休職で実施校が 10 校に減ったものの、対象学年が 5 学年と 6 学年に拡大したことなどがあり、学習者数は 2344 名と増加している²。最終学年の 12 学年まで日本語教育が継続される予定のため、今後もしばらくは学習者数が増加していくと考えられる。一方で、学校の日本語教員数は、2018 年 5 月現在 16 名（休職中の教員は除く）であり、学習者数に対し教員数が大幅に不足している。さらに、国内で唯一日本語学科が設置され、日本語教員の養成機関となりうるアザディ名称世界言語大学（以下、アザディ大学）の卒業生は、今後数年間、毎年 10 名以下となるため、学習者数の増加に教員の供給が追い付かない状況が続くことになる。このように、教員数の確保が大きな課題の一つとなっている。

2. 各教科書の概要と制作の経過

2.1 5 学年向け日本語教科書『にほんご 5』

『にほんご 5』の制作は 2015 年 11 月からトルクメニスタン教育省の指示により開始された。当時、アザディ大学日本語学科に所属していた筆者とトルクメン人講師 2 名が制作に携わった。最初に 5 学年から 12 学年までの学習内容を決定し、その後、教科書制作に移った。5 学年では、名詞文を学習項目の中心に置き、①身近なテーマについて日本語で簡単に説明したり、やり取りしたりできること、②日本について知ることを目的とした。『にほんご 5』の内容は表 1 の通りである。全 5 課構成とし、各課を 1~4 節に分けた。各節の構成は、「①かいてみよう（ひらがなを書く練習）→ ②いってみよう（単語・文型導入）→ ③はなしてみよう（会話練習）→ ④きいてみよう（聴解練習）→ ⑤かくにんしよう（単語の確認）→ ⑥かいてみよう（単語を書いている練習）」である。

表 1 『にほんご 5』の内容

課	テーマ	内容（丸数字は各課の節の番号）
0	にほんどトルクメニスタン ひらがな・カタカナ・あいさつ	①日本語の特徴を知る ②ひらがな・カタカナを学ぶ③あいさつを学ぶ
1	じこしょうかい	①自分の名前を紹介する
2	ともだち・かぞく・せんせい	①友達や先生を紹介する②家族を紹介する ③家族の仕事を紹介する
3	すうじ・ひにち・たんじょうび	①学年と年齢を伝える②今日の日付と曜日を言う ③自分の誕生日を伝える
4	がっこう	①時間割を言う②昨日の出来事を言う ③学校にあるトルクメニスタンのものを紹介する ④身の回りの物を日本語で何と言うか質問する
5	きょうしつ	①自分の物がどれか言う②自分の物ではないと言う ③友達から物を借りる④先生の間所を伝える

5 学年の生徒は全員、日本語初学者である。したがって、次の点に配慮した。まず、「いってみよう」と「はなしてみよう」では、トルクメン式アルファベットにより日本語の読み方を、そして、単語にはトルクメン語訳を併記した。次に、視覚的な補助を取り入れた。例えば、単語にはすべて絵や写真を添えた。また、「いってみよう」の文型が「おとうさん（家族）はかいしゃ（場所）ではたらいしています。」のように 2 種類以上の単語が必要となる場合、単語は種類に分け、単語を囲う枠に色をつけた。一方、文型は「___は___ではたらいしています。」のように単語を挿入する部分を下線で示し、下線の色と単語の枠の色を一致させ、文型のどこにどの種類の単語を入れればよいか一目で分かるようにした。そして、教科書に準拠した音声教材も合わせて制作した。

一方で、出版社や編集者に教科書制作の意図を理解してもらうことが非常に困難であった。出版社や編集者にとって、これまでトルクメニスタンで制作してきた外国語教科書と『にほんご 5』が大きく異なっていたためである。草稿の段階では、各節に学習目標と自己

評価のパート、各課の末には課のテーマに関する日本文化紹介のテキストをそれぞれトルクメン語で記載していた。ところが、出版社から「到達目標は教員が認識していればよい」「評価は教員が行うものである」「この教科書はトルクメニスタンについて日本語で言えるようになるための教科書なので、日本文化のテキストは必要ない」という理由ですべて削除されてしまった。削除されてしまった部分については、別途作成した資料を研修の際に日本語教員に配布し、その資料を基に授業を行うように伝えた。

2.2 6 学年向け日本語教科書『にほんご6』

『にほんご6』の制作は2016年10月から開始した。2016年9月より、国際交流基金から日本語上級専門家と日本語指導助手が派遣されることとなり、先のアザディ大学トルクメン人講師2名と合わせ、4名体制で教科書制作にあたった。尚、筆者の役職はアザディ大学日本語学科講師から国際交流基金日本語指導助手に変更になった。『にほんご6』制作に先立ち、『CEFR 改訂版案』³やトルクメニスタンで発行されている他の外国語の教科書を参考に、全学年の技能別到達目標を定め、教科書制作の基本となる日本語教育の指導要領を改定する作業を行った。そして、各学年で扱うテーマや内容、文法項目の大枠を決定した。また、少ない回数ではあるが、学校訪問が可能となったため、授業の様子や教科書に対する教員の感想・要望を教科書制作に反映させることができた。『にほんご6』の内容は表2の通りである。全8章構成とし、各章は2課もしくは3課に分けた。各章の構成は、「Aもくひょう（テーマと目標の確認）→ B各課の活動 → Cかきましよう（単語や文を書いてみる練習）→ Dかくにんしましよう（自己評価）→ Eいえでよみましよう」である。「B各課の活動」は、「①だいいじなことば（単語導入）→ ②いいましよう（文型導入）→ ③ともだちとはなしましよう（会話練習）・ききましよう（聴解練習）・読みましよう（読解練習）・やってみよう（応用練習）」であり、課によって③の内容は異なる。

表2 『にほんご6』の内容

章	テーマ	内容（丸数字は各章の課の番号）
1	かぞく	①家族がどんな人か伝える②家族の人数を伝える
2	おみせ	①ほしいものの名前と個数を伝える②値段を質問し聞き取る
3	がっこう	①学校で使われる指示を聞き取る②体調が悪いことを伝える ③各教科の感想や友だちの性格を言う
4	トルクメニスタン	①トルクメニスタンで有名なものを伝える ②各州で有名な場所を伝える③有名な場所を簡単に紹介する
5	いちねん	①今日の日付・曜日・天気を言う ②それぞれの季節できれいなものやおいしいものを伝える ③トルクメニスタンの記念日がいつか言う
6	しゅみ	①自分の趣味を伝える②好きなスポーツを伝える
7	まち	①自分の町にある建物を言う②建物の位置を伝える ③ある場所までの行き方やかかる時間を伝える
8	しごと	①家族の仕事を伝える②自分のできることで得意なことを伝える ③将来なりたい仕事を伝える

『にほんご 5』からの内容面での変更点は次の通りである。まず、テーマの幅を広げた。『にほんご 5』は、自分自身や身の回りの人物、学校生活が主なテーマであった。一方、『にほんご 6』では、「おみせ」「トルクメニスタン」など、他の身近なテーマも取り入れ、より幅広いテーマの日本語に触れられるようにした。次に、日本語で伝えられる内容を広げた。『にほんご 5』では、主に名詞文を扱い、事実を伝えることを中心としていた。一方、『にほんご 6』では、形容詞文を導入し、友達や家族の性格を伝える、自分の町の特徴を伝える、教科の感想を伝えるなど、事実に加え人物の性格や事物の特徴、自身の考えなどを簡単に述べられるようにした。したがって、『にほんご 5』とテーマが同じでも、『にほんご 5』より日本語で伝えられる内容は広がっている。

形式面での変更点は次の通りである。まず、8章構成にした。「1学期に2章ずつ進む」という進度の目安を示すためである。次に、単語導入と文型導入のパートを分けた。単語の聴解インプットを重視するため、「単語導入→文型導入」という授業の流れを明示的に示すためである。さらに、各課の活動を増やした。教員から教科書の活動を増やしてほしいという要望があったため、そして、授業観察において教科書に掲載された内容を基に教員自身で活動を広げることが難しい様子が見られたためである。他にも、各章の目標や自己評価を敢えて日本語で記載したり、「よみましょう」に日本に関するテキストを入れたりすることで、『にほんご 5』で削除されてしまった内容を盛り込むことができた。

2.3 7学年向け日本語教科書『にほんご 7』

『にほんご 7』の制作は2017年9月から開始した。2017年10月頃から各学校への巡回が可能になったため、『にほんご 7』の制作では、教員が教えている様子や生徒が学んでいる様子を反映することができた。また、制作中の『にほんご 7』を試用する機会をアシガバット市140番学校で得られ、その結果も教科書制作の参考にした。

『にほんご 6』との変更点は次の通りである。内容面では、動詞文を導入し、日々の行動や習慣などを簡単に述べられるようにした。形式面では、まず、全体を8章2課構成にし、「1コマで1ページ、2週間で1課、1か月で1章、1学期で2章進む」という授業進度を明示した。そして、教科書内に授業の進め方に関する教員向けの指示を明記した。この2点は、トルクメン人教員による実際の授業の様子を反映した結果である。授業観察では、一つ一つの活動に十分な時間をかけておらず、口頭練習や生徒の発話の機会が十分ではない様子が見られた。また、意味と日本語の音が結びついていない段階で日本語をアウトプットさせるなど、授業の流れが効果的な言語学習に繋がっていない場面もあった。したがって、「1コマで1ページ進む」と明示することで、教員に対し進度の目安を示すだけでなく、一つの活動に時間をかけ、口頭練習の時間や生徒の発話の機会を十分に設けることに意識を向けさせるようにした。また、効果的な言語学習を意識しながら活動内容や手順を考えることが難しい教員もいるので、活動内容と共に手順も示すこととした。尚、『にほんご 5』『にほんご 6』も『にほんご 7』と同じく、8章2課構成となるように、内容や目標などに変更を加え、全面的に改訂していく予定である。他にも、単語導入と文型導入の間に、文を聞きその文の中で使われている単語を聞き取る練習を入れた。文型導入の前に、単語だけでなく文による聴解インプットも入れることで、単語導入と文型導入の橋渡しとするた

めである。以上の変更を加え、本稿執筆現在も制作が進行中である。

3. 教科書制作から得た学びと今後の展望

以上の教科書制作から、筆者は次の3点を学んだ。1点目は、学校教育用教科書制作において、指導要領の内容を考慮する必要があるという点である。『にほんご 5』制作時は、筆者らに余裕がなかったこともあり、指導要領と教科書制作との関わりを十分に意識できなかった。しかし、指導要領にはトルクメニスタンが外国語学習を通してどのような生徒を育成しようとしているのかが示されており、教科書制作の基本となる。今考えれば当然ではあるが、だからこそ意識しておかなければならない。2点目は、教科書制作の関係者が持つ言語教育に対する考え方を知る必要があるという点である。『にほんご 5』では、学習目標や自己評価の記載が削除されてしまった。その一因として、「学習目標は誰が把握すべきか」「学習の評価は誰が行うべきか」などといった言語教育に対する考え方が、筆者ら制作者と出版社・編集者との間で異なっていたことが挙げられる。教員の間でも、「評価は教員がすべき」という考え方が根強く、自己評価の意義が伝わっていない印象を受けることもある。教科書制作の意図を認識してもらうためにも、まず教科書制作の関係者が持つ言語教育に対する考え方を知る必要があると感じた。3点目は、生徒にとっての学びやすさだけでなく、教員にとっての教えやすさも考慮する必要があるという点である。『にほんご 5』では、敢えて多くの活動を教科書に載せなかった。それぞれの現場で教員が自由に活動を考えられるようにするためである。しかし、日本語教員の多くは日本語教育経験が浅く、自身で活動を考えることが難しい教員もいた。さらに人員不足のため多くのコマを持たなければならず、時間的な余裕がないという状況もある。このように、この教科書を使って学ぶ生徒の視点だけでなく、この教科書を使って教える教員の視点も意識しなければならないことを、この教科書制作を通じて強く実感した。

最後に展望として、今後の教科書制作をトルクメン人教員の育成に繋げていく必要性が挙げられる。中等教育段階における日本語教育は始まったばかりであり、多くの教員の日本語教育経験は浅い。また、日本語教育導入の決定が突然であったため、準備期間が極めて短く、十分な教員養成を経ないまま現場に立たされている教員がほとんどである。さらに、国としての日本語教育の方針も明確に定まっているとは言えない状況にある。したがって、教科書を使いながら日本語を教える中で、トルクメン人教員が日本語教授能力を高めたり、日本語教育の意義を認識したりできるようにする必要がある。なぜなら、それが将来的にトルクメニスタンの日本語教育を牽引していくトルクメン人教員の育成に繋がるからである。そのためには、教科書制作と並行して、教員用指導書を作成したり教員研修でフォローしたりしていく必要があるだろう。トルクメニスタンの日本語教育の将来的な発展を視野に入れ、任期終了まで教科書制作を継続していきたい。

謝辞

本教科書制作、及び、本稿執筆にあたり、隈井正三元国際交流基金派遣日本語上級専門

家、佐藤五郎国際交流基金派遣日本語上級専門家から大変貴重なご意見を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

注

- 1 2013年9月の学制変更後、5学年（10歳～11歳）から12学年（17歳～18歳）までとなった。
- 2 2017年12月時点。筆者が各学校に電話にて聞き取り調査を行った。
- 3 『CEFR Illustrative Descriptors Extended Version 2016 Pilot version for consultation』を指す。現在は『CEFR Companion Volume with New Descriptors (2018)』として <https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989> にて公開されている。

参考文献

国際交流基金ホームページ日本語教育国・地域別情報トルクメニスタン(2016年度) <<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/turkmenistan.html>> (2018年5月31日)

(うえはら たつひこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程修了)